田辺聖子
長篇全集
5

タンポポ・クレイジー

田辺聖子

田辺聖子　長　篇　全　集

# 夕ごはんたべた？

田辺聖子

文藝春秋

田辺聖子長篇全集　5
夕ごはんたべた？
一九八二年四月一日第一刷

定価　一八〇〇円
著者　田辺聖子
発行者　杉村友一
発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話（〇三）二六五―一二一一
印刷所　凸版印刷
製本所　矢嶋製本
製函所　加藤製函
万一、落丁乱丁の場合はお取替え致します

© Seiko Tanabe 1982　Printed in Japan

夕ごはんたべた？

解説　長部日出雄

装幀　灘本唯人

AD　坂田政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

田辺聖子長篇全集第五巻

夕ごはんたべた？

# ああ　往診

吉水医院の朝は、院長夫人の玉子が、みずから、表に水を打つことからはじまる。

医院といっても、急いで通る人は必ず見すごすような、小さい構えで、看板はあがっているものの、それとて、左隣りの靴屋「ハイテヤ」と、右隣りの食堂「豚々亭」の看板に挾まれて、消え入らんばかりの風情である。

おまけに、

「皮膚科・内科　吉水医院
　医学博士・吉水三太郎」

の字も、半分、剝げかかって判読しにくい。

夜間は灯のつくはずの、突き出したネオンの看板も、半年前、こわれて灯がつかなくなってから、ツイそのままである。この間も、そのことで、妻の玉子とすこし論争した。玉子は看板屋を呼んで直そうと提案したが、

「ええがな。電力節約や」

と院長の三太郎は言い捨てて、そのままである。

妻の玉子は、一つ何か気になると、むやみやたらと気になる女である。

「ネオンもネオンやけど、ついでにウチも、もっと広告出した方がええことないのかしら？」

何から思いついて、そんなことをいうのかわからない。玉子は、何かで影響をうけるとその時々で、すぐ意見のかわる、むら気な女である。

「広告？」

「そうよ、この近くのお医者さんで広告、出してないとこ、ウチだけとちがうかしら？」

「べつに必要ない」

と三太郎博士は言い捨てる。

「でも、あんまり、しなさすぎると思うわ。パパ、ちょっと、のんきすぎるのよ」

何をいうとんねん。急に今になって何を言い出すやら。吉水医院はもう二十年、この猥雑な下町で開業してきたのだ。通りの裏に昔の闇市が姿を変えたような巨大なマーケットがあり、近くに阪神電車の踏切があって、一日中チンチンと鳴っているような、更に百メートルもゆけばドヤ街があって、競艇のある日は、人であふれる安い飲みやがつづいているような、そういう尼崎の下町である。

開業当初は、広告らしいこともしたが、二十年たった今

は、もはやPRしたとて、どうということもなく、それより、これ以上患者がふえたら、昼寝と碁に、さしつかえると、吉水三太郎は思うものだ。

三太郎はとくに患者をふやしたくはないのだ。

そういうと、いかにも、現在、患者が押しかけて多すぎるように聞こえるが、そうではなく、患者のくるときより、来ないときの方が多いというような、たまに患者の顔を見ると、人なつかしくなるというような程度である。三太郎は四十八歳の半ばをすぎており、まだ壮健であるから、ヒマなのよりは仕事が忙がしい方がいいが、さりとて、そのために狂奔して仕事をふやそうという気はない。

「吉水皮膚科はこちら」と矢印を入れる看板など、要らざる小細工と思うものだ。

広告のつぎに、妻の玉子が主張したのは、部屋の造作である。

壁紙を貼ったらどうか、という。

三太郎は、思わず、妻の顔を見た。

二十年、待合室はベニヤ板で、診察室は変哲もない白壁で、やってきたのだ。

なぜ今になって、色気を出さねばならんのだ。

「だって、この間、歯医者さんへいったらとてもきれいな、ブルーの壁紙貼ってあったんですもの。芦屋の歯医者さんは、やっぱりちがうわ」

そうか。

それでよめた。

妻は、この間うちから虫歯に金冠をかぶせてもらうために歯医者がよいをしているが、近くに歯医者も多いのに、わざわざ、隣り組の医者の夫人の紹介で芦屋まで出かけ、そこで、下らぬチエを仕入れてきたにちがいない。

何かヒントを得ると、妻は、それを無上のものと思いこむ女である。そうしてやかましく言い立てる。(尤も、長つづきはせず、すぐ次のヒントに心を奪われるのだが)

「それにバックグラウンドミュージックを流してはるの。待ってる患者さんの心をやわらげるためだそうよ。アンニーローリイなんか、しずかにやってるの。よかったわ。ねえ、ウチも、あれやってみたらどうですか」

三太郎はナマ返事する。

(いったい、ワシと結婚して何年になる、思とんねん)

と三太郎は妻のことを思うわけだ。

(この土地に住んで何年になるねん、まだわからんのかいなあ)

とも思う。

この雑駁な下町の風趣に二十年なじみ、三太郎という男に二十年、連れ添ったならば、壁紙がどうの、バックグラウンドミュージックがどうの、と、寝言にも出ないはずである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ここの患者ときた日には、注射のため腕を出させると、くりからもんもんが飛び出すような、または、三流バアへこれから出勤するという、しゃがれ声の女が、はいってくるなり「センセ、また出たがな」とスカートをまくりあげて下腹の田虫を見せるような、ざっくばらんな連中なのだ。アンニーローリイなんぞ聞かせてどうする気だ。しかし玉子はつづけて、

「それに、パパ、いつまでも白い診察着なんかやめて、うすいブルーのを着たらどうかしら！」

「歯医者が着てたのか」

「そうよ。それがハンサムな先生で、ベン・ケーシーみたいやったわ。ウチも、ベン・ケーシー式の上っぱりにしましょうよ」

と妻は熱っぽく、いう。

三太郎は、そんなものを着たくないのだ。そんなもの着て誰に見せようというのだ。このへんの患者に、そんなことをしてみせたら、人々は悲しそうな顔をして、ついに恐れをなし、よりつかなくなるであろう。そういう洞察もできず、目前の片々たる現象にすぐ気をとられるところが妻の、あるいは女の、クセなのである。

ベン・ケーシー式の衿のつまった診察着より先に、三太郎のいま現在着ている診察着のほころびぐらい、縫ってくれたらいいと、三太郎は妻のことを思うわけだ。

三太郎は、いつも、そのことを妻に言いそびれる。遠慮しているわけではなく、つい、言い忘れるのである。思い出したときは、妻はそばにいない。

妻がそばにいるときは、三太郎が忘れている。女と猫は人のよぶときに来ず、よばぬときにくるといったのはメリメであるが、三太郎にとって妻は、必要なときそばにいず、そばにいるときは不必要な存在である。

さて、三太郎は、うららかな初夏の朝、診察室で、刷りたてのインクの匂う新聞をひろげた。

すると、診察着の袖の片方が垂れて来た。二、三日前、机の角で裂いて、そのままなのだ。

着更えてもよいが、まだ汚れていないのに勿体ないから、三太郎はしかたなく、机のひき出しからホッチキスを出して、袖口の布を合わせ、ぱちんと止めておく。

そうして、「必要なときにそばにいず、そばにいるときは不必要な存在」だと、妻のことを思うわけである。

その妻は、いま、しきりに、家の前で水を打っている。

院長夫人みずから水を打つくらいだから、ともかく、医院の規模は知れてるのだ。それも、小さなバケツに一杯の水もあれば、足りるくらいの面積だから、諸事、大仰でなくていい。三太郎は、

「衣は以て寒を防ぐに足り、家は以て小バケツ一ぱいの打水で足る」

とかたく信ずるものである。ただ食だけはうまいものを食いたいと思うものだ。それも、珍味佳肴というのではない、安物でもいいから新鮮で、料理がまずくても心意気のあることを指す。

妻は左隣りの靴屋「ハイテヤ」と、右隣りの「豚々亭」の前にも余分の水を撒き、ハイテヤの女房と愛想よく話を交わしている。玉子は、わりに愛想のいい「シャベリン」（大阪弁で、おしゃべりのことを、そういう）の女であって、それが玉子の、どちらかといえば美点の一つである。

しかし、玉子の愛想よさは、夫に対してよりも、世間に対しての方に顕著である点に、特色がある。

玉子はバケツとヒシャクを、がらがら鳴らしながら入って来た。患者も家族も同じ戸口から出入りするという、ぞんざいな町医者の家である。なおぞんざいなのは、玉子の挙措である。横太りで満月のように丸い顔をしており、太っているせいか、動作の小まわりが利かず、何かにつけてぶち当る気味がある。

だから、やたらに騒々しい女なのである。

怒っているときはよけいやかましい音をたてる。

機嫌のいいときも、やはり、にぎやかに音をたてる。だからどっちにしても一年中、ばたんばたんと音をたてるのだ。

彼女はバケツを奥へ持ってはいり、こんど診察室へやってきたときは、白い上っ張りをつけた看護婦の姿になっていた。

晩の診察時間には、タエちゃんという若い看護婦見習いの子が来てくれるが、朝は来ないから、妻が薬局に坐る。もっとも、彼女の仕事の大半は、患者たちとのオシャベリである。それも、治療に直接関係ないことの方が多い。妻は、世間話の好きな女である。

三太郎は袖口のほころびを忘れぬうちに妻に言おうとしたら、妻がへんなことを言い出すので、また忘れてしまった。

「パパ、どうして大学の医局に残らなかったの？」

三太郎は新聞をめくる手をしばし止め、そのままの姿勢で、じっとして黙った。唐突なのも妻のクセであるが、あと、何が出てくるかわからない。

玉子は、唐突に怒ったり、唐突に詰ったりする女である。しかし、いまはべつに怒ってる気配も詰る様子もない。

そのへんを片付けながら鼻歌まじりでいう。薬局といっても、診察室のつづきの、ちょっと奥まった場所で、壁には造り付けの棚が何段もある。

三太郎は妻の言葉の裏を考えていた。しかし、いくら考えても、大学の医局と、何の関係があるのかわからない。何しろ、医者の学校を出てもう二十四、五年にもなろうかという年ごろ、何で残らなかったのかといわれてもすでに

往事茫々、昔のことはカスミの奥に忘れてしまった。
三太郎はめんどくさいから返事をせぬ。
「大学の先生というのは、お医者さんの中ではやっぱり、一ばん、格が上なのね」
それがどうした。
「開業医というのは、地位が低いんやて」
玉子は、ころころと笑う。低い開業医にくっついて食わしてもろとる奴は、よけい低いのやないかと三太郎は思うものだ。
妻はいまは、鋏で、薬を切り離していた。
「パパ、『白い巨塔』読んだの？　面白いわねえ。大学の医学部の教授て、魅力的よお。どうして大学の先生にならへんかったの。あたし、教授夫人になりたかったなあ」
「院長夫人になってるやないか」
「ウチの院長なんて盲腸と、どっこいどっこいですよ。ともかく、大学の医学部教授というのはすごいのよ、学問もできないといけないし、腕も立たないといけないし、……お金あつめが巧くて、弟子の面倒見がよくないといけないし。それに、教授同士の暗闘がたいへんなんやて」
開業医もたいへんなんやて、といいたい。患者が来なくてはこまるし、来すぎては疲れるし、退職金はないし、気疲れはひどいし、病気で休んだら一円も入らないし。
しかし三太郎はそんなことは口に出していわない。とりあえず、だまっている。
「パパ、『白い巨塔』よみなさいよ、すごーく面白いんやから。公民館の図書室から借りてきてんのよ、教授の大変な世界がようく、わかるわ」
なんで今更そんなものをよまんならんねん。「大変な世界」はどこも一緒やと三太郎は思うものだ。

今朝の患者第一号は、商店街のはきもの屋の隠居である。七十五の爺さんで、吉水医院の戸が開くのを待ちかねて、いそいそと、やってくる。老人医療がタダになってから、老人の患者が多いのは、どこでも見られる現象である。
この爺さんもどこが悪いというのでもないが、もうおそらく、耐用年数をこえているのであって、ひととこ、ふたとこ修繕したとてホッチキスで応急処置をしたとて、間に合わぬのだ。といって早急に命にかかわる老人病もない。肩が凝るとか風邪ひきぎみとか、ばかり並べている。
更にいえば、爺さんは、医院へ来て三太郎としゃべり、玉子に愛想をいわれ、待合室で新聞を読むのだけがたのしみというのであるらしい。
型の如く診察され、薬をもらうと、爺さんは待合室でゆっくりと新聞をひろげて、咳払いしながら、新聞をよむ。一紙をよみ終ると、
「センセ、ほかのはおまへんか」

といい、三太郎のもっているのと交換する。
三太郎はこの爺さんと碁会所でしばしば手合せする。折折、爺さんは新聞をたたみつつ、
「しかし何だんな、センセとこみたいに、こない、朝からヒマなん珍らしおまんな」
と率直な感想をのべる。この爺さんは、悪気なく感心しているのである。
「ふしぎやなあ」
と三太郎も応ずる。まことに三太郎も異とする所である。
「センセ、赤ひげみたいに、親切やのになあ。ま、口に上手はないが、赤ひげみたいにまじめや思いまんのやが」
爺さんは同情するがごとくいい、この爺さんは正直者だけに、ゴマをするようなことはいわぬから、本心なのであろう。
「赤ひげはかなわんなあ」
三太郎は赤ひげ先生ほど、構えとらへんわいと思うものだ。医は算術とも思わぬが、仁術と大見得切るのも、含羞を感ずる。しかしそれにしても、なんでこうヒマなのか、
「まあ、気候のええときは患者も少ないでな。春と秋やな。秋も少ないな。柿の実の赤うなるときは、医者の顔が青うなる、いうてな」
そんな話を、三太郎はのんびりする。診察室と待合室とで、話し交わしていても、ほかに人がいないから邪魔にならない。
乱暴に戸が開いて、男がとびこんでくる。
「ゆうべせっかく来たのに、休みやったやんけ。急に休んだらどもならんがな」
首にタオルを巻いた仲仕風のおっさんが、そういいつつ、上りこんでくる。
「ゆうべはしとったぞ」
「ほんまか。ネオンつけとかな、休みと思うやないけ」
「電力節約や」
「なにぬかしやがんねん。沢山もうけやがって」
こんな言葉ぐらいに驚いたりヒンシュクしたりしていては、この界隈で医者は張っていけない。
男が薬局兼受付の窓口を通らないで、すぐ診察室へ入ってきたと思ったら、いつのまにか玉子はいないのだ。玉子は用を思いつくとすぐ、奥へはいるのである。三太郎はカルテの棚の前に立ち、
「名前は」
「前に来たやんけ、田中」
「最近、来てへんやろ？」
「医者なんか、しょっ中来とったら困るやないけ、無茶いうてくれな」
治療に来たのかケンカを売りに来たのかわからない男であるが、こういう、話しにくい男、あんがい根は人のいい

ことが多い。
「何しとんねん。早よせえや」
と遠慮もなく咎める。三太郎も遠慮なく応酬する。
「ちょっと待てや。いまカルテさがしとんねん。やかましィいうな」
「あったか？」
「ない」
「ほってもうたんやろ」
などというが、男は別に怒っているのではないのである。しかし患者がぞんざいな時は、三太郎もぞんざいにいう。彼は人を見て法を説く方である。三太郎は回転椅子をまわし、
「どないしてん」
「手がかゆうなるんじゃ」
「見せてみいや」
などというのであって、こういう連中に、「拝見しましょう」といっていたのでは恰好つかない。
男が何かいった。しかし、とたんに二階から鳴り出した狂躁なる音楽で、その声はかき消された。
「何やて？」
「三月ぐらい前から出来てなおらんのじゃ」
と男は声を張り上げた。
「主婦湿疹みたいやなあ。仕事なにしとんねん？」

こんどは男が、「何やて？」と聞き、すさまじいロックに眉をしかめて、
「やかましいな」
といった。
三太郎はその音がどこからくるのか、わかっている。それは息子の大吉の部屋である。
三太郎はロックが聞こえてくると、あまりの怒りに動悸が烈しくなる。かねて、彼は息子に、レコードは絶対に大きな音を出さぬように、と申し渡していた。彼はロックはただの騒音、キチガイ音楽としか思えない。ベートーベンやシューベルトならいざ知らず、ブリキやガラスをこするような、破れた銅鑼を乱打するような野放図な、しどけない、物狂おしい雑音が音楽とよべるであろうか。好き好きだからまあ仕方ないが、楽しむときは自分一人で楽しんだらよいのだ。三太郎はそのために、息子にはイヤホーンを使えと命じているのだ。
彼は二階を見上げた。しかし、男に注射をして、薬を出すまではがまんしていた。診察を片づけてから、大股で二階へ上っていった。その間も、音楽は頭上からなだれおちてくる。
三太郎は、ぼさッとしていて何を考えてるかわからぬところがあり、「塗箸でトロロをつかむ」という大阪のコト

ワザのように、捉まえどころがないというので、家族の者には「半仙」とアダナされている。

半分、仙人だというのである。それはつまり、半分は俗人だということだが、俗なる部分はどこを指すかというと、酒好き、碁、ゴルフ、パチンコ、テレビ好きの点をいうのであるらしい。浮世のほだしがさまざまあり、全部仙人、つまり「全仙」とはいかぬと、家族はみとめているのであるらしい。

しかし三太郎は、こと子供に関する限り、「半仙」にすらなれないのである。不出来な二人の息子について考えると、カッカして煩悩の血がさわぐ。とうてい、達観なんか、していられない。大悟解脱には、ほど遠い。

半分にしろ、仙人風にみえるのは、三太郎のあきらめの結果であって、何でこれが悟りすましていられようか。ただいま、とりあえず人生の修羅場のまっさい中なのである。

三太郎は足音を鳴らして階段を上る。そのふみしめた力のある足音に、彼の怒りがこもってるのである。

廊下の一ばん奥の息子の部屋からは、天地も崩れ落ちんばかりの狂躁なる音楽がとどろきひびいていた。

三太郎はドアを叩く。しかし、それは音楽にかき消される。だんだん、怒りが手のつけようないほど燃え上ってくるのがわかる。

朝の九時十時という時間に（尤も、それは昼も夜も同じだが）何というバカな音をたてるのだ。その怒りの内には、世間の衆生がみな、働いたり学校へいったり、孜々として、それぞれの生業や学業にいそしんでいるのをヨソに、朝からゴロゴロして、傍若無人な音をたててはばからないバカ息子のぐうたらぶりに対する怒りも含まれているのである。

「大吉！」

と三太郎はドアをあけた。大吉はパジャマ姿でベッドにねころんで煙草をふかしていたが、あわてて起き上って、灰皿にこすりつける。

うなじにかぶさる、うっとうしい長髪で、三太郎より背の高い男である。十九歳の浪人であるが、三太郎は、これがふつうの浪人なら世間によくあることだから怒りはしないのだ。十九にもなって、中学浪人なのだ。つまり高校中退でぶらぶらしている、何とも目ざわりな浪人であるのだ。

妻の玉子や、長女の丸子は、末息子の大吉に甘くて、何とかいう歌唄いの少年の、女の子か男の子かわからないような可愛らしいスターに、大吉が似ているというが、三太郎はそれ所ではない。顔の紐のほどけた、のほほんとした、そのくせ、父親にはいつも、ふくれっつらしか見せない息子に対し、しぶとい怒りが渦巻いてるのである。

「もっと小さくしなさい、いま仕事中やないか！　何と思とんねん！」

三太郎は珍らしく声を励まして叱咤する。誰のおかげで、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.